

〈研究ノート〉

地域との継続的な互惠関係の構築

一学びを地域に還元する場の形成一

林 翠 芳
大 塚 薫

要 旨

本研究課題は事前・事後学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取り組みを理解し、多文化共生社会において、どのように地域振興を推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。また、このような一連の活動から得た学びを地域に還元する仕組みの構築を目指している。

2022年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、これまで2年間で中止されてきた交換留学生の受入れが再開されたことにより、留学生の受講生が増え、受講生25名のうち留学生10名と日本人学生15名による国際共修授業が行われた。また、体験学習も感染拡大防止策を図りつつ体験先の協力を得て予定通り3回実施することができた。授業の前半は地域の現状及び課題を認識するため、県の産業政策及び中山間地域の過疎化の現状をビジターセッションで学び、東部地域の中心都市での高校生との交流、中山間地域住民との交流を中心とした体験学習が行われた。そして、授業の後半では多文化共生社会における地域振興を中心に異文化理解教育や県の外国人受入れ政策及び高知県の取り組み状況を学習した。また、地域に生きる大学として、地域との連携活動等に関する学びを深め、外国人社員を積極的に採用している県内企業を見学するとともに交流活動を通じた体験活動が行われた。

受講生の終了アンケート評価の結果、一連の授業の活動の満足度は5段階評価中4.5で高評価を博した。本授業を通して受講生個々人が地域の現状や課題を認識し、自分事として地域との互惠関係の構築や多文化共生社会における地域振興について解決策を提案するに至ったと言える。学びを地域に還元する一つの取り組みとして、最終発表はビジターセッション並びに体験学習で協力してくださった諸機関や団体等の方々にも公開した。

【キーワード】

多文化共生社会、異文化理解、地域課題、地域振興、地域還元、互惠関係

1. はじめに

本研究課題は事前・事後学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取り組みを理解し、多文化共生社会において、どのように地域振興を推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。また、このような一連の活動から得た学びを地域に還元する仕組みの構築を目指している。授業の最終発表では受講生から「実際に学生が経験してきた学びや、他の地域で取り組まれている方策を参考にしながら、地域にマッチした取り組みの提案を地域の外からの視点で学びの還元として学生が担えるのではないかと感じた」とのコメントが寄せられた。

総務省によると、多文化共生は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されており、具体的な取り組みとしては、(1) コミュニケーション支援、(2) 生活支援、(3) 意識啓発と社会参画支援、(4) 地域活性化の推進やグローバル化への対応、とある。本授業の課題として、受講生が最後に①「地域との互惠関係を構築するための方策」、②「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選びグループ発表とともに、レポート課題として提案することになっているが、今回のグループ発表では、①のテーマについては一つのグループから、そして②のテーマについては四つのグループからそれぞれ発表があった。また、最終レポートについても上記の総務省が挙げている具体的な取り組みにも触れる提案が見受けられた。詳細については文末に挙げている受講生のレポートを参照されたい。

本授業は国際共修として据えられており、留学生と日本人学生が体験学習、協働学習等におけるグループ活動を通して、留学生と日本人学生の効果的な学びあいをデザインする取り組みを実践している。また、本研究課題で取り上げる体験的な教育活動の手法は、体験・実践を通して学生の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し、「教育の質的転換」が期待できると

考えられる。

本研究課題は今回で6年目の実施となる。2022年10月から2023年1月にかけて、高知大学の正課の授業として共通教育社会分野科目において「地域文化理解」の授業が実施された。新型コロナウイルス感染症の影響により2020年4月より中止されていた協定校から来日する交換留学生の受入れが再開されることにより、留学生の受講生も増え、受講生全体の40%を占めた。また、授業も対面での実施が実現され、体験活動も交流先団体等の全面的な協力を得て、安芸市の高校生との交流、大豊町地元住民との交流、企業との交流活動を対面で臨むことができた。授業のテーマは前年度に引き続き、「多文化共生社会」という視点をを用いて地域との互惠関係の構築、地域振興を考える内容であった。

2. 「地域文化理解」の授業概要

「地域文化理解」の授業は、2022年度第2学期に高知大学の共通教育社会分野科目において「地域住民との交流や体験活動を通じた教育活動を通して、受講生に地域課題を理解してもらうとともに学生の目線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探り、学びを地域に還元する仕組みの構築」を目的に開講された。

16コマの授業において、前半は地域の現状及び課題を認識する内容を中心に展開した。まず、講義(1)(ビジターセッション①)では高知県全体の産業やその取り組み内容、課題を理解し、県全体の産業政策を学ぶ内容構成で、高知県産業振興推進部計画課の職員にご協力いただいた。また、講義(2)(ビジターセッション②)では高知県の中山間地域で過疎化が進行し、高齢者が中心となっている大豊町の現状と課題について集落活動センター「そばの里立川」の立川地区活性化推進委員会会長にお話を伺った。そして、体験学習(1)では高知県東部地域の中心都市である安芸市にある県立安芸桜ヶ丘高等学校(以下、安芸桜ヶ丘高校)の生徒との交流を交えて体験活動を行い、安芸市の現状や課題について理解し、高校生とともに町の振興について考える体験型学習を実施した。また、体験学習(2)では、ビジターセッション②の講義内容と関連した大豊町立川地区の過疎高齢化に伴う人口減少等の現状について地元住民との交流を通して理解を深めた。

後半は前半の高知県の現状や課題を踏まえ、多文化共生社会における地域振興のテーマを中心に授業を展開した。まず、異文化、自文化についての理

解が深められるよう、授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義(3)が行われた。そして、講義(4)(ビジターセッション③)では高知県商工労働部雇用労働政策課の職員に講義にご協力いただき、高知県で暮らす外国人の状況と高知県外国人生活相談センター(ココフォーレ)の相談活動についてご紹介いただいた。そこで、相談を通じた外国人の暮らしと地域との共生への支援について詳細に語られた。講義(5)(ビジターセッション④)では、「地域と大学を繋ぐ活動」について本学の次世代地域創造センターの赤池准教授にお話を伺った。

体験学習(3)の企業との交流活動では、積極的に外国人社員を採用している世界で活躍する県内企業である株式会社高知丸高の社員との交流を通して、多文化共生社会についての見識を深めることに繋がった。

受講生は上記の一連の活動を通して最終課題として、私の考える①「地域との互惠関係を構築するための方策」、②「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマの中から一つ選び、グループで発表するとともに自分の考えをレポートにまとめ、提出した。

授業は<表1>「地域文化理解」の授業シラバスの通り実施された。

なお、本授業を受講した学生は25名であり、内訳としては、日本人学生が15名、留学生が10名(中国出身6名、韓国出身1名、タイ出身1名、マレーシア出身2名)であった。また、日本人学生15名のうち、高知県内出身者が2名、高知県外出身者が13名であった。

<表1> 「地域文化理解」の授業シラバス

実施日	授業内容	実施場所
10.05	協働学習 オリエンテーション、事前アンケート調査	学内(教室)
10.12	協働学習 講義(1)高知県庁職員による「高知県産業振興計画について～高知県の現状と課題～」についての講義	学内(教室)
10.19	協働学習 ①高校生が作成した安芸市・高知県等についての紹介動画の視聴、②講義(1)振り返り	学内(教室)
10.22	体験学習(交流)(1) ①アイスブレイキング(レクリエーション活動を通しての交流活動)、②高校生による観光ガイド、③振り返り活動(ポスターセッション)	学外(安芸市)
11.09	協働学習 講義(2)立川地区活性化推進委員会会長による「大豊町の現状と課題」に関する講義	学内(教室)
11.12	体験学習(交流)(2) ①餅つき体験 ②地域住民との交流(インタビュー活動) ③立川番所見学(地域や参勤交代の歴史についての学習)	学外(大豊町)
11.16	協働学習 ①講義(3)授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義、②講義(2)と10/22及び11/12の体験学習の振り返り	学内(教室)
11.30	協働学習 講義(4)高知県庁職員による「高知県で暮らす外国人の状況とココフォールの相談活動について」の講義	学内(教室)
12.03	体験学習(交流)(3) 株式会社高知丸高 ①外国人材の活用について：海外展開事業、ミャンマー(高野会長より) ②高知丸高で働いて【陳氏】 ③外国人社員(3名)へのインタビュー	学外(南国市)
12.14	協働学習 講義(5)本学教員赤池慎吾准教授による「①過疎高齢化の現状と課題、②『地方創生』と日本遺産」についての講義	学内(教室)
01.11	協働学習 グループ発表の準備	対面&オンライン
01.18	グループ発表 私が考える①地域との互惠関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策	学内(教室)+ オンライン (Teams)
01.25	レポート提出 私が考える①地域との互惠関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策 事後アンケート調査提出	オンライン (Teams)

3. 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習(講義)

本研究課題では受講生が高知県の現状を認識し、幅広い視点を持って課題について考えてもらえるように、協働学習では、ビジターセッションを中心に見識造詣が深い方々の協力を得て授業を展開した。授業の内容については、「2.『地域文化理解』の授業概要」で述べた通りである。

3-1 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習の評価

授業の取り組みの一環として、授業並びに各活動後に受講生に振り返りシートの提出を課している。それによると、講義に関する評価は<表2>、<グラフ1>と<グラフ2>の通りである。講義の満足度は5点満点中、4.1

ポイント以上の高い評価が得られており、受講生が意欲的に授業に取り組んだことが窺えると同時に、それぞれの講義担当者による工夫された講義が理解度と満足度の高い数値に表れ、講義を通して地域の現状を認識し、そして地域の課題に対する県の取り組みや地域の取り組み状況等への理解が深まり、効果的な学習効果が得られたと考える。

＜表2＞ 講義に関する評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	授業形態 平均値
1	講義(1) 講義(1)に積極的に参加したか	6	16	3	0	0	4	4.3	4.1
	講義(2) 講義(2)に積極的に参加したか	15	4	4	0	0	4.4	4.8	4.5
	講義(3) 講義(3)に積極的に参加したか	11	5	6	0	0	3.8	4.7	4.2
	講義(4) 講義(4)に積極的に参加したか	7	8	5	2	0	3.6	4.4	3.9
	講義(5) 講義(5)に積極的に参加したか	14	9	1	0	0	4.5	4.6	4.5
2	講義(1) 講義(1)を聞いて高知県の産業に関する理解が深まったか	9	13	3	0	0	4.3	4.2	4.2
	講義(2) 講義(2)を聞いて大豊町の地域活性化に関する理解が深まったか	9	13	0	1	0	4.3	4.3	4.3
	講義(3) 講義(3)を聞いて多文化共生社会におけるコミュニケーション方法に関する理解が深まったか	11	7	4	0	0	4.3	4.4	4.3
	講義(4) 講義(4)を聞いて高知県の多文化共生に向けた取り組みに関する理解が深まったか	9	10	3	0	0	4.1	4.5	4.3
	講義(5) 講義(5)を聞いて高知県の過疎高齢化社会の現状並びに高知大学の「地方創生」の取り組みに関する理解が深まったか	13	11	0	0	0	4.5	4.6	4.5
3	講義(1) 講義(1)の満足度	8	14	3	0	0	4.4	3.9	4.2
	講義(2) 講義(2)の満足度	16	6	1	0	0	4.7	4.6	4.7
	講義(3) 講義(3)の満足度	11	9	2	0	0	4.5	4.3	4.4
	講義(4) 講義(4)の満足度	8	9	5	0	0	4	4.4	4.1
	講義(5) 講義(5)の満足度	16	8	0	0	0	4.6	4.8	4.7

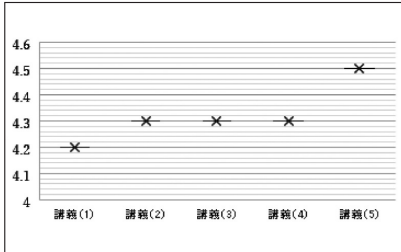
注1：5段階評価

積極的に参加した ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜん参加しなかった

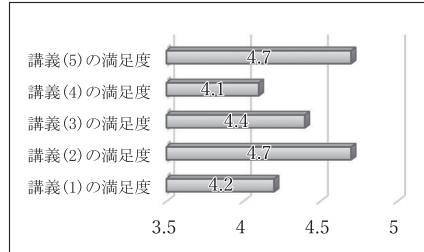
よく理解できた ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜん理解できなかった

大変満足した ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜん満足できなかった

注2：講義(1)出席者25名、うち日本人学生が15名、留学生が10名。講義(2)出席者25名、うち2名振り返りシート未提出のため、日本人学生が14名、留学生が9名。講義(3)出席者23名、うち1名振り返りシート未提出のため、日本人学生が12名、留学生が10名。講義(4)出席者20名、欠席者5名のうち、2名が後日動画を視聴し、振り返りシートを提出したため、22名分（日本人学生が14名、留学生が8名）、講義(5)出席者24名、うち日本人学生が14名、留学生が10名。



＜グラフ1＞ 講義に対する理解度の平均値



＜グラフ2＞ 講義に対する満足度の平均値

3-1-1 講義(1)に対する評価

＜表2＞に示した通り、講義(1)(ビジターセッション①)では高知県の産業に関する理解度と講義に対する満足度はともに4.2の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

＜表2＞の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「高知県産業振興について、現在の課題やこれから取り組むべきことについて理解した」(理工1年M)、「高知がどのような変遷を辿ってきて今どのような状況にあり、様々な観点から問題点にアプローチをしていることを知ることができた」(理工2年F)、「現状と課題の関係性に着目しながら話を聞くことができた」(地域2年F)、「さまざまな関係組織・団体と連携することで産業振興に取り組み、成果を出していることが分かった」(地域4年M)、「『地産外商』を掲げて取り組みを進め、高知県の強みを生かした振興計画を行っていることを知った」(地域2年F)、「詳しい資料とパワーポイントのおかげで、高知県の産業振興について全体像を知った」(理工2年M留学生)、「高知県のいろいろな産業の強みと弱みを知ることができた」(留学生F)等のコメントがあった。

＜表2＞の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「高知県に住み始めて1年半が過ぎたが、このような県が行っている取り組みを知る機会がなかったため、貴重なお話を聞くことができた」(理工2年F)、「高知県の産業を成長させていくために、どのようなことに積極的に取り組んでいるのか学ぶことができた」(地域2年F)、「高知県の他県に対してアピールできるポイントと、現状を確認すると共に、高知県の産業振興について考えることができた」(人文1年M)、「(高知県産業振興計画について～高知県の現状と課題～)を多角的に理解し、資料の解説や直感的な動画視聴を通じて授業の内容が理解しやすかった」(理工1年M留学生)、等のコメントが見ら

れた。

以上のように、講義(1)は高知県全体の課題や高知県の取り組みを理解するのに貴重な講義であった。受講生からも「実際にこのようにお話しを聞ける機会は貴重だと思う」(地協4年M)との感想が寄せられた。

3-1-2 講義(2)に対する評価

<表2>に示した通り、講義(2)(ビクターセッション②)では大豊町の地域活性化に関する理解については4.3、満足度については4.7の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。<表2>の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「データだけでは知ることのできない、住民の方の生活の様子を知ることができた」(地域2年F)、「自身の学部での実習地も大豊町であるが、今まで知らなかった取り組みを知ることができた。とくに、ノーリフト農業については初耳であったため、本日の講義を通して理解が深まった点を実習でも活かしていきたい」(地域2年F)、「変わっていく地域をただ見つめるのではなく、自分たちに今できることをしっかりと考えて実践していることが分かった」(地協4年M)、「今まで大豊町のことはあまり知らなかったため、今回の講義で具体的にどのような街でどのような問題を抱えているのか理解することができた」(農林1年F)、「過疎高齢化に伴う人口減少によりコミュニティの確保、集落の消滅、文化遺産の維持、農業・林業・観光の衰退など、様々な課題に直面しなければならないことを理解できた」(留学生F)、「大豊町の現状を十分に理解し、改善すべき課題、問題の原因を理解した」(理工1年M留学生)、等のコメントがあった。

<表2>の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「私は、大豊町について何も知らなかったため、大豊町に実際に足を運ぶ前に大豊町について知り、目的意識をあらかじめ持ったうえで大豊町に足を運ぶことができるため、このような理解を深める授業があり大変満足」(理工2年F)、「現状や課題を文字としてインプットするだけではなく、写真や実際の住民の声を聞きながら知ることができた」(地域2年F)、「データに基づいた話と、住民の方の日常の様子を両方をバランスよく聞いた」(地域2年F)、「データとビデオを用意して説明いただき大変満足でした」(留学生F)等のコメントがあった。また、「地域住民の生の声を聴ける機会はとても貴重であり、知識ベースの学問では感じられないような地域の気持ちや感情まで感じることができた」(地協4年M)のようなコメントもあり、本授業により効果的な学習

が得られたのではないかと考えられる。

3-1-3 講義(3)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(3)では多文化共生社会におけるコミュニケーション方法に関する理解については4.3、満足度については4.4の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「留学生等の外国人のみでなく、人と接する際には、思い込みや印象を持ちすぎるのは良くないということを改めて学んだ」(理工2年F)、「国によって人柄やコミュニケーションなどに違いがあることが理解できた」(地域2年F)、「国によってコミュニケーションの取り方に違いがあることは知っていたが、ジェスチャーの意味も違うことは知らなかった。他国のジェスチャーについて考えるときも、日本人の学生と留学生とは異なる意見が出ることもあって、国による考え方の違いを感じさせられた」(地域2年F)、「各国の文化とコミュニケーションの例を聞いて啓発された」(留学生F)、「多文化交流で使うべき方法を知った。次は実践したいと思う」(理工1年M留学生)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「参加型の授業で、楽しみながら学べた」(人文1年F)、「誤解を生むハンドサインや動作、各国がハイコンテキストやローコンテキストのどこに位置するのかといった新しく学んだことが多々あり、非常に興味深く感じた」(理工2年F)、「日本以外の国の考え方に触れることができた」(地域2年F)、「ジェスチャーの意味の違い、同じ状況でも物事の捉え方に違いが出ることなど、国によって様々な違いが見られることが分かり興味深いと感じた」(地域2年F)、「定義を説明しただけでなく、インタラクションを通じて定義の意味をよりよく理解した」(理工1年M留学生)等のコメントがあった。

3-1-4 講義(4)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(4)(ビジターセッション③)では多文化共生に向けた取り組みに関する理解については4.3、満足度については4.1の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「今まで、高知在住の外国人がどのような支援を受けることができるのかよく知らな

かったため、今回の講演でどのような取り組みが行われているのか具体的に知ることができた」(農林1年F)、「高知県で暮らす外国人の状況や、課題がしっかりと説明できる程度まで理解できた」(人文1年M)、「取り組みについて初めて知ることが多く、興味深かった」(地域2年F)、「高知県の多文化理解に対する取り組みを今まで知らなかったため、新しい知識が身についた」(地域2年F)、「課題を通じて共生共存を目指した発展が望まれていることが分かった」(理工1年M留学生)、「外国人を地域の一員として受け入れて、人材を確保する上で、体制を作って支援していることがわかった」(留学生F)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「高知県における外国人の状況がどのようなものであり、課題がまだたくさんあるものの、それに向け様々な活動を行っているということ、とといった初めて学んだことがたくさんあり、非常に面白く、満足した」(理工2年F)、「自分自身は日本人で、あまり不自由なく高知で暮らすことができているため、外国人がどのような面で不便さを感じているのかなど、深く考えたことがなかったので今回それを知ることができた」(農林1年F)、「外国人に対する日本人の対応や取り組みが学べた。高知ならではの取り組みも特徴的であるように感じた」(地域2年F)、「高知県で生活している外国人がどのような課題を抱えているのか、少しではあるが知ることができ、また、多文化共生には何が大切であるのか学ぶことができた」(地域2年F)等のコメントがあった。

3-1-5 講義(5)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(5)(ビジターセッション④)では高知県の過疎高齢化社会の現状並びに高知大学の「地方創生」の取り組みに関する理解については4.5、満足度については4.7の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「高知県の過疎高齢化社会を、世界や日本といった大きなスケールのお話から現状を見ることができ、それに対して、具体的に自治体が行っているたくさんの取り組みと、そこに対して大学関係者がどのようにかかわっているのかを学ぶことができた」(理工2年F)、「過疎高齢化社会が非常に深刻な問題であること、それを緩和させるために私たちができることを知ることができた」(農林1年F)、「高知県の現状の説明と高知大学が取り組む具体例を通して、人がや

ろうとしていることを知り、自分に何ができるかを考えるようになった」(留学生F)、「高知大生が地域創生ということで、中芸地域でどのような活動を行っていたのか、地域の人や留学生とどのような関わりをしていたのか、話を聞くことができた」(地域2年F)、「本授業を通して、高知県の過疎高齢化における現状や高知大学での取り組みを知ることができた。高知県の過疎高齢化は日本の中でも早い段階で地域課題として起きている。そのため、高知県がこれらの地域課題を解決するために取り組むことは、後に他の地域や日本全体の先駆けた例となる」(地域2年F)、「今回の授業は結構分かりやすかったからきちんと理解できた」(留学生F)等のコメントがあった。

<表2>の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「内容はもちろん、話がとても面白く印象に残りやすかった」(人文1年F)、「非常に楽しく講義を受けることができ、たくさんのことを学べ、そして自分たちにできないことがないか、自分たちは具体的に何ができるのかといったことを考える一つのきっかけとなった」(理工2年F)、「留学生への配慮があったので、今まで聞いていたビジターセッションの中で一番聴きやすかった」(理工2年M留学生)、「今までは知らなかった地方創生の取り組みを知ることができ、とても興味がわく内容だった」(理工1年M)、「実際に大学が行っている海外演習などの取り組みを知ることができ、自分も来年は参加したいと思えた。この授業がなければ、このような大学で行われている取り組みを知る機会はなかった」(地域2年F)等のコメントがあった。上記の受講生のコメントから分かるように大変満足度の高い授業であった。

4. 地域の現状と課題・多文化共生に関する体験活動

今年度は感染拡大防止策を取りつつ、高校や企業、地域の方々の協力を得て、予定通り3回の体験学習を実施することができた。体験学習(1)は高知県東部地域の中心都市である安芸市にある安芸桜ヶ丘高校の生徒との交流を通じて行われた。交流活動は「地域の魅力再発見」を軸に、安芸市の現状や課題について理解し高校生とともに町の振興について考える内容であった。体験学習(2)は大豊町立川地区の地域住民との交流を通して、「伝統文化の体験学習や地域住民との交流」をテーマに行われた。体験学習(3)は外国人社員を積極的に採用している地元企業の高知丸高を訪問し、外国人社員との交流を交えて行われた。以下それぞれの活動を見ていく。

4-1 体験活動(1)—高校生との交流



<写真1> グループワークの様子

その後、体験学習(1)が行われたが、具体的な活動として、(1)アイスブレイキング、(2)高校生による安芸市観光ガイド、(3)ワークショップ活動の3部構成で実施された。(1)と(2)の担当は高校生、(3)は高知大生という役割分担で行われた。(1)アイスブレイキングは安芸桜ヶ丘高校の総合実践室で行われ、5グループに分かれて活動を行った。アイスブレイキングでは、ジェンガをしながら①名前・出身地、②趣味、③好きな食べ物、④好きな観光地、⑤好きな特産品、⑥出身地の紹介、⑦行きたい観光地という七つの内容について自己紹介を行い、グループ活動を行った。その後、安芸桜ヶ丘高校の生徒の案内で安芸市郊外に残る岩崎彌太郎生家を観光した。



<写真2> ワークショップ発表の様子

観光案内終了後、再び安芸桜ヶ丘高校に戻り5グループに分かれて地域の魅力を再発見し、地域の振興を考えるべくグループワークが行われた。具体的には、半日の活動を振り返り安芸市が地域おこしの面で抱えている課題を踏まえ、その改善策としての地域振興にふさわしい漢字一字を各グループで選択し、それを選んだ理由を皆の前で発表するポスターセッションが行われた。安芸の自然や風情をいかに外部に発信していくかについて各グループとも真剣にディスカッションを行い、それぞれのグループが選んだ漢字は「集」(1グループ)、「知」(2グループ)、「報」(3グループ)、「伝」(4グループ)、「美」(5グループ)であった。全てのグループの発表を聞いた各人が相

体験活動(1)—高校生との交流活動は2部構成で実施された。これまでは1日かけて高校生との交流を兼ねて体験学習を実施してきたが、2020年、2021年同様感染症防止策の一環として、体験学習を半日にし、高校生が作成した動画の視聴を通して安芸市等について紹介してもらう形で事前学習を

観光案内終了後、再び安芸桜ヶ丘高校に戻り5グループに分かれて地域の魅力を再発見し、地域の振興を考えるべくグループワークが行われた。具体的には、半日の活動を振り返り安芸市が地域おこしの面で抱えている課題を踏まえ、その改善策としての地域振興にふさわしい漢字一字を各グループ

互評価を行った結果、伝統と宣伝の両方の意味合いを持つ「伝」統をSNS等で積極的に「伝」えるべきと発表した4グループが最も得票数が多く、次いで地元の歴史等の案内・宣伝不足を解消し多くの人に「知」らせるべきと「知」について発表した2グループも多くの参加者から共感が得られた。

4-1-1 体験学習(1)の評価

後日受講生から提出された振り返りシートの一部(5段階評価)を<表3>に示す。<表3>と<グラフ3>から読み取れるように、すべての評価項目の平均値が4.1ポイント以上を得ており、体験活動としては満足度の高い指数が得られた。なお、受講生の評価コメントについては4-1-3を参照されたい。

<表3> 安芸桜ヶ丘高校との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	授業形態 平均値
1	高校生との交流活動に積極的に参加したか	12	10	0	0	0	4.5	4.6	4.5
2	高校生との交流がよくできたか	11	10	0	0	1	4.5	4.2	4.4
3	高校生との交流活動全体の満足度	12	8	2	0	0	4.5	4.4	4.5
4	活動評価①高校生とのアイスブレイキング活動の満足度	13	6	3	0	0	4.6	4.3	4.5
5	活動評価②高校生による安芸市ツアーガイドの満足度	14	6	1	1	0	4.7	4.3	4.5
6	活動評価③高校生とのグループワークの満足度	10	6	5	1	0	4.2	4.1	4.1
7	高校生との交流活動で安芸市のことがよく分かったか	9	9	1	3	0	4.3	3.8	4.1

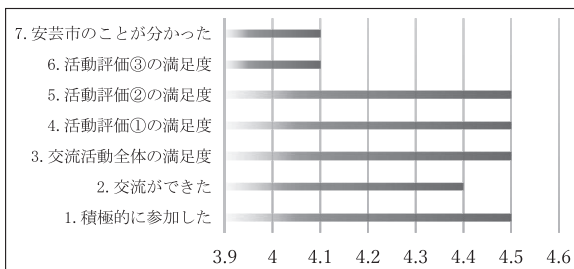
注1：5段階評価(表5、表6と表9が同様)

よく分かった ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜん分からなかった

よくできた ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜんできなかった

大変満足した ← 5・4・3・2・1 → ぜんぜん満足できなかった

注2：当日の活動に参加した受講生は22名、うち日本人学生が12名、留学生が10名。



<グラフ3> 安芸桜ヶ丘高校との交流活動における評価

4-1-2 体験学習(1)の成果還元—安芸市活性化に関する提案

振り返りシートでは4-1-1で述べた評価の他、記述のみの設問としては、「安芸市をより活性化するには何がポイントか」、「安芸市の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「安芸市の観光資源について何か提案があるか」等を設定した。

「安芸市の活性化のポイント」については、「景観や食、観光において魅力があると感じるが、インパクトがないので、ツアー等を用意し、宣伝と招致の一体化とそれに伴う交通網の整備がポイントと感じる」(教育2年M)、「安芸市をより活性化するためには、地域ならではの素材を活かすことが大切であると感じた。今回の交流を通して、初めて安芸市では『しらす』が有名であることを知った。しらすはどこの地域でも当たり前で食べることができるものではない。なぜなら、海が近い安芸市だからこそ、新鮮で美味しいしらすを食べることができるからである。そのため、他の地域では味わえない地域ならではの『食』を存分にアピールするための策をたてる必要があるのではないかと考えた」(地域2年F)、「ここは美しい自然と深い歴史があるので、観光業に力を入れるのもいいと思う」(留学生F)等のアイデアが寄せられ、活性化にはまず多くの人に知ってもらうこと、古き良き安芸の町並みをSNS等を通してアピールする必要があること、「観光立市」が安芸市の活性化に繋がるとの意見が多かった。

「安芸市の観光の改善」については、「まず市のホームページを改善すべきだと思う。安芸市の観光ページに入った時、まず目に飛び込んでくるのが文字ばかりだと見る気がなくなってしまうかもしれないので、色鮮やかな写真等で興味を引くなどしてもいいと思う」(農林1年F)、「観光資源は十分あるが広くPRできていない状況なので、それを全国の多くの人に知ってもらえるよう、SNSなどを駆使して発信することができたら良いと思う」(農林1年F)、「岩崎彌太郎や豊かな資源があるのにそれをあまりうまく活用しきれていないように感じたので、SNS等を用いて地域について外部へのアピールを積極的に行う」(地域2年F)、「観光地にはレジャー施設や解説内容をもっと設置し、観光地周辺を開発すべき」(理工1年M留学生)、「いろいろな商業施設に形に残るようなお土産をおく」(留学生M)等の提案があった。

「安芸市の観光資源についての提案」については、「安芸市は第一印象として、田んぼが多いと感じた。そのため、田植えや稲刈りの収穫体験があれば面白いのではないかと感じた。また、田んぼを使用していない時期も『泥ん

こ合戦』を子ども向けに開催すると、ユニークな観光資源になるのではないかと考えた」(地域2年F)、「食べ物美味しいことが魅力だと聞いたので、美味しい食べ物をより多く人に食べに来てもらえるようにもっとアピールすべきだと思った」(地域2年F)、「各観光地の周辺の道路や駐車場を整備すると、観光客が訪れやすくなると思う」(農林1年F)等の具体的な提案が見られた。これらの意見は、安芸桜ヶ丘高校の生徒によるツアーガイド等の半日の活動を通しての気づきが提案に反映されているものと思われる。

4-1-3 体験学習(1)―高大連携の効果

2018年度より本研究課題に高知県東部地域の中心都市である安芸市にある県立高校の生徒との交流を組み入れ、2022年度も2020年度と2021年度に続き、感染症防止策を講じつつ、県立安芸桜ヶ丘高校の生徒と対面で半日の交流を実施した。

高大連携とは高校と大学が連携して行う教育活動のことであり、本研究課題は授業の一環として実施してきたが、一方、高校側は課外活動として、異文化に興味がある生徒が参加した。活動の目的は「～地域の魅力再発見～一緒に地域振興について考えよう」であり、交流活動は双方にとって有意義なものであった。活動後、高校生にもアンケートに協力してもらった交流活動の評価を<表4>と<グラフ4>に高校生・大学生ともに示している。項目1～3は5点満点中4.4ポイント以上の評価となっており、満足度の高さが窺える結果となっている。項目4はツアーガイドを提供する側の高校生に対しては、「大学生との交流活動で安芸市のことが案内できたか」という設問であり、ツアーガイドを享受する側の大学生に対しては、「高校生による安芸市ツアーガイドの満足度」を問う内容であった。その結果、大学生の評価が4.5ポイントであったのに対して、高校生は4.1ポイントという結果となった。高校生からは、「話が上手いと言ってもらえた」、「できた」のような自己を評価するコメントのほか、「様々な所でよみこみ不足などを感じた」、「安芸について勉強不足だなと感じた」と謙虚に反省するコメントもあった。また、「彌太郎について分からない」、「自分たちも知らないことが知れた」、「案内が難しい」のようなガイドを通じて気付いたことに関するコメントもあった。一方、大学生は「よく調べられていて、わかりやすかった」(人文1年M)、「クイズなどを交えて岩崎彌太郎のことについて知ることができたので非常に楽しかった」(農林1年F)、「質問にも自分ができる限りの範囲で回答してくれ、

下調べもしっかりしてくれていたのを感じた」(農林1年F)、「緊張しながらも一生懸命に教えてくれて、今まで知らなかったことを知れた」(理工1年M)、「高校生の知識が深く、たくさん質問してもすべて答えてくれた。知らなかった知識をたくさん知ることができた」(地域2年F)、「下調べがしっかりしてあり、個人で観光するだけでは知り得なかったことを教えてもらった」(教育2年M)、「岩崎彌太郎についてより深く理解したので、今後、岩崎彌太郎やほかの高知県の偉い人の歴史をさらに知りたいと関心を持った」(留学生F)等のコメントがあり、高校生のツアーガイドについては好評であった。なお、今回の活動時、安芸桜ヶ丘高校の校舎が改修工事の最中で、移動に時間を要したため、高校生によるツアーガイドは岩崎彌太郎生家のみだった。

また、項目3の「交流活動全体の満足度」については、高校生から「たくさん仲良くなれた」、「楽しかった。得るものがあった」、「大学生から話しかけてくれて、とても楽しかった」等の楽しく交流活動に参加できたというコメントが多かった。一方、大学生からは、「交流を通して、いままで知らなかったたくさんのことを知ることができた」(人文1年M)、「高校生や留学生の方々と安芸市を肌で感じて学ぶことができた」(農林1年F)、「友達になり、質の高いディスカッションができた」(留学生F)、「高校生と関わる機会があまりなかったので、地元の高校生の視点で地域について知ることができた」(地域2年F)、「地元の文化だけでなく、高校生の考え方や学ぶべき点もよくわかった」(理工1年M留学生)等のコメントがあった。しかし、半日だけの活動ということもあり、「もう少しゆっくり話を聞く時間が欲しかった」、「ワークショップについてはもう少し話す時間が欲しかった」という声もあった。

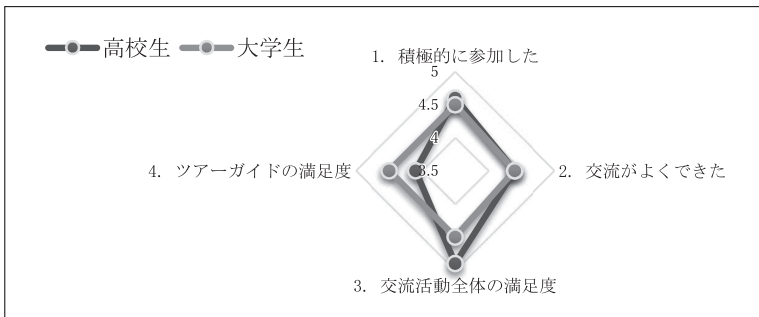
また、記述式のみ設問として「交流を通じて学んだこと、感じたこと」について、高校生からは、「色々な課題やその解決策を親身に考えてくれた」、「話すことが楽しくできた。新しい考えを持てた」、「安芸市をどうすれば良くなるのかわかった」、「課題がたくさんあることを知った」、「すごくコミユ力があってすごいと感じた」、「色んな考えがありたくさんのことを学べた」、「県外や海外の学生と話して、その県のことなども聞けた」等のコメントがあった。大学生からは、「安芸桜ヶ丘高等学校の生徒さんは、グループ活動やガイドなどいろいろなことに一生懸命で本当に素晴らしいと思った。岩崎彌太郎生家や安芸市営球場、近くの公園など安芸市にある魅力を全く知らなかったが、高校生からたくさんのお話を聞いた。しかし、私が安芸市のこと

を知らなかったように他の人も知らないということが分かった。今後は安芸市の魅力を伝える活動が広まれば、どんどん活性化していくと思った」(人文1年F)、「この活動を通して、地域の課題を考えるいいきっかけになった。普段考えることがないので、とてもいい機会だと思った」(理工1年M)、「安芸市の高校生と触れ合うことで、安芸市についてもこれまでよりも知ることができたと、自分では気づけないような視点からの意見も知ることができた」(地域2年F)、「地元の高校生が感じている地元のことを知る機会はなかなかないので良い経験となった」(地域2年F)、「とても有意義なイベントで、お互いの交流を通じて私の今の生活環境とは異なる地域文化を知ることができた」(理工1年M留学生)、等のコメントがあった。本活動の趣旨である「～地域の魅力再発見～一緒に地域振興について考えよう」を明確に理解している内容のコメントが多く見受けられ、高大連携の取り組みが有効であることが感じられた。高大連携の取り組みは相互にとってウィンウィン (win-win) の相乗効果が得られたのではないかと考えられる。

＜表4＞ 安芸における交流活動の評価（高校生の評価&大学生の評価）

NO	高校生の評価	平均値	大学生の評価	平均値
1	大学生との交流活動に積極的に参加したか	4.6	高校生との交流活動に積極的に参加したか	4.5
2	大学生との交流がよくできたか	4.4	高校生との交流がよくできたか	4.4
3	大学生との交流活動全体の満足度	4.9	高校生との交流活動全体の満足度	4.5
4	大学生との交流活動で安芸市のことが案内できたか	4.1	高校生による安芸市ツアーガイドの満足度	4.5

注1：交流活動に参加した高校生は10名、活動途中で他のイベント対応で抜けた生徒がいるため、アンケートへの回答者数は7名。



＜グラフ4＞ 安芸における交流活動の評価（高校生の評価&大学生の評価）

4-2 体験活動(2)―大豊町立川地区住民との交流活動



<写真3> 餅つき体験

地域の現状と課題・多文化共生に関する体験学習(2)は2部構成で実施された。ビジターセッション②ではまず大豊町の現状と課題についての学びとともに、日本におけるお餅の文化やお餅ができるまでの工程、そして立川番所の歴史についても事前学習を行った。2020年度と2021年度は新型コロナナ

ウイルス感染症の影響を受け、大豊町立川地区における地域住民との交流活動は中止せざるを得なかったが、2022年度は地域住民のご理解並びに大豊町町役場、高知県産業振興推進部地域支援企画員の協力を得て交流活動が再開できる運びとなった。当日は「伝統文化の体験・学習や地域住民との交流」をテーマに行われた。現地(立川刈谷集会所)に到着後、まずオリエンテーションが行われ、地域と学生それぞれの代表の挨拶が行われた後、地域の方から餅つきの仕方についての説明がされ、その後、餅つき体験が行われた。昼食は体験で作られたお餅の試食と地域の食材を用いて地域の方が作ってくださったお弁当をいただいた後、受講生から地域の方へのインタビュー(教員側が事前にワークシート用意)を実施した。その後、地元の方から参勤交代の歴史等について説明を受けながら旧立川番所書院を見学した。

4-2-1 体験活動(2)の評価

<表5>の振り返りシートの活動評価で読み取れるように項目3を除き、評価はいずれも4.4ポイント以上になっており、体験学習並びに地域との交流に対する満足度が高く、インタビューを通しての交流と体験活動が功を奏したと考えられる。

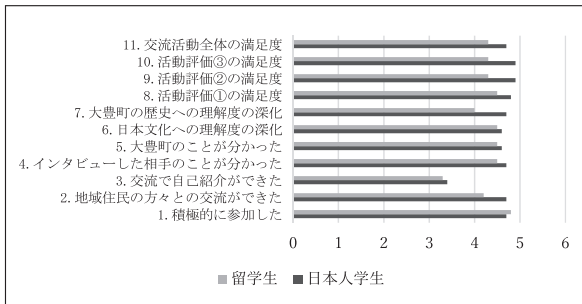
<表5>と<グラフ5>で分かるように、項目11の交流活動全体の満足度は高く、日本人学生の方が満足度が高いことが窺える。評価の理由として、「餅つき体験や、地域の方との交流を非常に楽しむことができた」(農林1年F)、「大豊町に実際に足を運んだからこそできた活動や、知れたことが沢山あった」(理工2年F)、「地域の方から大豊町や立川地区についての様々な話を聞くことができたし、国宝でもある立川番所に訪れ貴重な体験をすること

もできた」(地域2年F)、「学部の実習で大豊町には何度か訪れたことがあったが、大豊町(立川)の人口が少ないことから、今まで一度も住民と出会ったことがなかった。しかし、今回の交流を通して地域住民の方と接するだけでなく、旧立川番所書院を訪れたり新しい発見がたくさんあった」(地域2年F)、「中国には高齢化がこんなに進んでいるところは少なく、イメージとは違う日本を見たような気がする」(留学生F)等のコメントがあり、地域の方と直接コミュニケーションが取れる体験学習を通して、大豊町についての理解の深化にもつながったと思われる。

<表5> 大豊町の交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	平均値
1	今回の大豊町地域住民との交流活動に積極的に参加したか	15	5	0	0	0	4.7	4.8	4.8
2	今回の活動で大豊町の地域住民の方々との交流がよくできたか	12	7	1	0	0	4.7	4.2	4.6
3	大豊町の地元の方との交流で自己紹介ができたか	5	4	4	7	0	3.4	3.3	3.4
4	インタビューした相手のことがよく分かったか	13	7	0	0	0	4.7	4.5	4.7
5	今回の大豊町の地元の方との交流で大豊町のことがよく分かったか	13	6	1	0	0	4.6	4.5	4.6
6	餅つきの話や餅つき体験により日本の文化がよく理解できたか	13	5	1	1	0	4.6	4.5	4.5
7	立川番所見学と地域や参勤交代の話により大豊町の歴史がよく理解できたか	14	3	1	1	0	4.7	4	4.4
8	活動評価①餅つき体験の満足度	15	4	1	0	0	4.8	4.5	4.7
9	活動評価②大豊町地元の方との交流(インタビュー活動等)の満足度	15	5	0	0	0	4.9	4.3	4.8
10	活動評価③立川番所見学・地元の方による参勤交代の歴史の話の満足度	15	4	1	0	0	4.9	4.3	4.7
11	今回の交流活動全体の満足度	13	6	1	0	0	4.7	4.3	4.6

注：4名が欠席、1名が無記入のため、上記回答は20名分、うち日本人学生が14名、留学生が6名。



<グラフ5> 大豊町の交流活動における評価

4-2-2 体験活動(2)成果還元—大豊町活性化に関する提案

振り返りシートでは4-2-1で述べた評価の他、記述のみの設問としては、「大豊町をより活性化するには何がポイントか」、「大豊町の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「大豊町の観光資源について何か提案があるか」等があった。

「大豊町をより活性化するポイント」については、「SNSでの広告、口コミ、パンフレット作製・配布などで観光客を増加させること。コンビニなど生活に最低限必要なものを設置し、移住を考えている人のフットワークを軽くさせる」(人文1年F)、「背伸びせず大豊町にあるものを十分に活用する」(人文1年M)、「立川番所なども今回の授業をきっかけに知ることができたので、もっと知ってもらうきっかけを作るとすれればいいと思う」(理工1年M)、「自然や農業は関心の高い人(特に若年層)が多い分野でもあるため、それをアピールしつつあとはどれだけ多くの人に大豊町へと足を運んでもらいさらに定住してもらうかどうかだと思った。定住してもらいたいのであればそのための環境整備が必要不可欠なのではないかと思った」(地域2年F)、「交流人口を増やすことがポイントだと思う。いきなり移住人口を増やすことは難しいが、交流人口を増やしながらか少しずつ地域のことを知ってもらうことが人口増加のきっかけになると思う」(地域2年F)、「大豊町の歴史や資源を若い人に知ってもらうことが大切だと思う。また、大豊町には森林や畑といった林業や農業をするには十分な資源があるので、これらに興味がある人には積極的に発信していくのもよいのではないかと思った」(地域2年F)、「空き地・空き家をゲストハウスにすれば観光客がさらに訪れると思う」(留学生F)等のコメントが寄せられ、人を増やす、特に若者の交流人口を増やすには、大豊町の良さを知ってもらうことが重要とのコメントが多かった。

「大豊町の観光改善」については、「イベント事したら良いと思う。それが地域の住民同士の交流の機会にもなり、観光客のその地域への親しみや興味は深まると思う」(理工2年F)、「様々な都合があり難しいとは思いますが、高知市内から大豊町までの交通網をもう少し整備したほうが良いと思う」(農林1年F)、「大豊町のパンフレットに『縄文から昭和までギュ〜と詰まった町』といったキャッチコピーが書かれていた。大杉(縄文時代)からお宝屋敷おおとよ(昭和)まで、それぞれの時代のもものが一つの町にあるため、各スポットを巡るバスツアーがあれば良いのではないかと考えた。大豊町内の観光スポットはそれぞれ距離があるため、車での移動が欠かせない。また、

それぞれの距離があることから目的が一つに絞られることが多い。例えば、道の駅大杉に立ち寄る観光客は、大杉を見るためにふらっと立ち寄る人が多い。実際に道の駅大杉の口コミでも、大杉までの道を尋ねるために道の駅大杉に寄ったり、大杉を見た帰りに小腹が空いて道の駅で立川そばを食べたりする人がある。そのため、大豊町を縄文から昭和まで詰まった町として売り出しているならば、目的を一つに絞って訪れるのではなく、全てのスポットが見て回れるような仕組みをつくる必要があるのではないかと考えた」(地域2年F)、等の具体的な提案があった。また、大豊町へ行く案内標識、看板を増やすことや、交通網の整備、観光地への誘致等の提案が多かった。

「大豊町の観光資源への提案」については、「料理、自然を全面的に押しして広告すればいいと思う」(人文1年F)、立川番所はコスプレの撮影場所にも使われたことがあるという話を聞き、このように若者になじみのある文化とも結びつけたイベントができると良いと思った」(農林1年F)、「ミニお遍路のような箇所があると聞いたので、その整備など昔のやり方(今回のもちつき、お茶の作り方)などを体験できるプログラムで人を呼ぶ」(地域2年F)、「大豊町の住宅はほとんどが築100年を超えていると聞いた。この住宅を古民家カフェや街並みの資源として活かさないかと考えた」(地域2年F)、「予算があれば、山林観光を発展させ、中国黄山に倣ってケーブルカーを建設し、観光客の観光体験を高めることができる。歴史文化スポットは、歴史回廊を建設し、歴史的な出来事を絵と文で紹介し、観光客の理解に役立つだろう」(留学生F)等の提案があり、また、「山でのサバゲーや害獣狩りコンテスト全国大会」(人文1年M)のようなユニークな提案もあり、アイデア溢れるものであった。

体験学習を通して高齢化している大豊町の現状を知り、そして自分にできることを考えるきっかけになったのではないかとと思われる。

4-3 体験学習(3)―企業と交流活動の概要

企業との交流活動については株式会社高知丸高の協力の下、高知建機技能センターで実施した。当日高知建機技能センターに到着後、①高野会長より外国人材の活用・海外展開事業等についての紹介があり、その後、②屋外にある高知建機技能センターの防災設備等を見学した。見学後室内に戻り、③小西課長より会社の事業紹介後、OGの陳さんによる「高知丸高で働いて」に関する紹介があった。その後④3グループに分かれて、OGの陳さんを含め



<写真4> 高知丸高会長による会社の取り組み紹介

取り組み状況を理解するとともに自分たちがどのように対応していくべきかを考えるきっかけになったのではないと思われる。

3名の外国人社員（台湾出身、インドネシア出身、ミャンマー出身）へのインタビュー活動（教員側が事前にワークシート用意）という内容で半日の交流活動が行われた。外国人材を積極的に採用し、海外にも事業を展開する高知県内の優良企業との交流を通して多文化共生社会における高知県の企業の取

4-3-1 体験学習(3)の評価

企業との交流活動後に受講生から提出された振り返りシートの一部を<表6>及び<グラフ6>に示す。<表6>から読み取れるように、評価の平均値が4.3ポイント以上を得ており、交流活動に対する満足度が高いことが窺える。

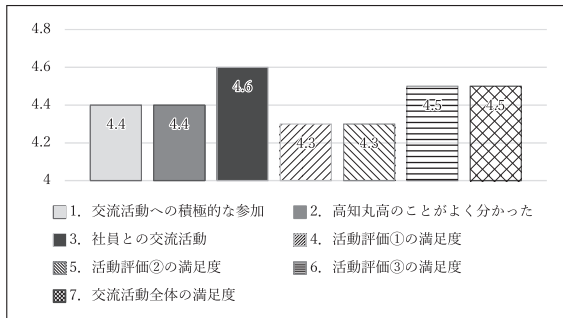
交流活動の満足度の項目を中心に見ていくと、項目4「高知丸高が行った企業紹介等の満足度」の評価理由として、「高知丸高の強みや特徴的な取り組みなどが分かりやすかった」（地域2年F）、「高知丸高の魅力がとても伝わったし、会長が本当に高知丸高を大切にしているのが伝わった」（人文1年F）、「橋の建築や土木工事のみならず、防災活動や正当な賃金での外国人の雇用なども行っており、素晴らしいと思った」（人文1年M）、「実際に会社の中を見て回ることができたのが非常に面白かった。また、本格的な防災器具を見たのも初めてで、災害の身近さを実感させられた。シェルターを見たときは災害に対する意識が1レベル上がった気がした」（地域2年F）、「防災や人材育成は私自身興味がある内容で、特に力を入れて取り組まれているようでお話が聞けてとても面白かった」（地域4年M）、「会社の現状だけでなく未来を見据えた紹介をされていたので、より会社の伸びしろ部分を実感することができ、まさに基礎工事のパイオニアであると思いながら説明を聞いていた」（地域2年F）等のコメントの通り、大変分かりやすい企業紹介を行っていただいた。

項目5「OGが行った高知丸高での仕事内容の紹介の満足度」の評価理由と

<表6> 企業との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	平均値
1	今回の高知丸高との交流活動に積極的に参加したか	10	11	1	0	0	4.4	4.4	4.4
2	今回の交流活動で高知丸高のことがよく分かったか	11	9	2	0	0	4.4	4.4	4.4
3	インタビュー活動を通して社員の方とうまく交流ができたか	13	8	1	0	0	4.5	4.7	4.6
4	活動評価①高知丸高の企業・取組みの紹介の満足度	9	11	2	0	0	4.5	4.1	4.3
5	活動評価②OGが行った高知丸高での仕事内容の紹介の満足度	8	12	2	0	0	4.2	4.3	4.3
6	活動評価③外国人社員とのグループ別インタビュー活動の満足度	10	11	1	0	0	4.7	4.3	4.5
7	今回の交流活動全体の満足度	13	7	2	0	0	4.6	4.3	4.5

注：当日の活動に参加した受講生は22名、うち日本人学生が13名、留学生が9名。



<グラフ6> 企業との交流活動における評価

して、「高知丸高に就くまでの経緯や、お仕事の紹介が非常にわかりやすく簡潔にまとまっており、面白かった」（理工2年F）、「自分自身の経験と併せて話して下さって分かりやすかった」（地域2年F）、「実際に海外から日本に働きに来た方が、どのような経緯で来日を決めたのか、また、現在はどのように生活しているのかを具体的に知ることができた」（地域2年F）、「実際に働いている人の生の声が聴けて、とてもおもしろかった」（人文1年F）、「日本で働いている外国人雇用者数や、高知県内の外国人をサポートしているサービスの実態について知ることができた」（人文1年M）、「良かった点だけでなく、苦勞した点もきちんと説明されていたため外国人社員ならではの視点を知ることができた」（地域2年F）、「高知丸高に就職した理由だけでなく、高知に魅力を感じた理由も述べられていて、地域協働学部の学生として、高知の魅力を再発見する良いきっかけになった」（地域2年F）等のコメントか

ら分かるように、高知の魅力の再発見にもつながったとともに、「今後の就職活動の参考になった」とのコメントもいくつか見られ、受講生それぞれが自身のライフプランを見つめるきっかけにもなったのではないかと思われる。

項目6「外国人社員とのグループ別インタビュー活動の満足度」の評価理由として、「日本で暮らしてきた社員ではなく、海外から来た社員の生の話を聞くことができ、非常に面白かった。積極的に色々な話を聞くことができたため、学ぶことがたくさんあった」(理工2年F)、「事前に用意していた質問に限らず、様々な会話ができてとても楽しく、ためになった」(地域2年F)、「大学に通っていると様々な国から来た留学生との交流はあっても社会人として働いている外国の方との交流の場はなかなかなくて良い機会だった」(地域2年F)、「とても面白い話がたくさん聞けたし、就職するときに参考になりそうなことを学んだ」(人文1年F)、「主観的な紹介だったが、新入社員から会社の中核を担うようになるまでの心境など率直な話を聞くことができ、働くことへのイメージができた」(農林1年F)、「外国人社員による日本の会社での就職の経験が聞けてすごく勉強になった」(理工2年M留学生)、「マンマー人の就職活動の経験を知り、外国人の日本での就職についても理解した」(留学生F)のようなコメントがあり、有意義な交流活動となった。

項目7「高知丸高との交流活動全体の満足度」の評価の理由として、「外国人を企業が受け入れる流れや目的を具体的に知ることができ、また、実際に企業で働いている外国人の社員の方のお話を聞くことができ、有意義な時間が過ごせた」(理工2年F)、「施設見学もインタビューも興味深いものが多かった」(地域2年F)、「会社の建物がとても魅力的で、土木の仕事のイメージが変わった」(地域2年F)、「様々な施設や設備を見学することができ、貴重な体験になった。また、外国人社員が日本で心地よく働けるための工夫も聞くことができた」(地域2年F)、「これまで知らなかった日本企業についての初歩的な知識が得られた」(留学生F)、「今回の交流活動までは高知丸高について何も知らなかったが、話を聞く中で高知丸高の魅力についてたくさん知ることができた」(地域2年F)、「製品や取り組みについてとても個性的で面白い内容が多く、会長から最近入った社員の方まで、楽しいお話をありのままに聞かせて頂けたように感じる」(地域4年M)、等のコメントがあり、半日の活動を通して、高知丸高に対する理解だけでなく、留学生にとっては日本の企業に対する理解の深化にもつながったと思われる。

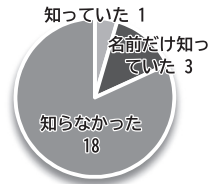
4-3-2 企業との交流活動の効果

<表7>と<グラフ7>に示した通り、「以前から高知丸高を知っていたか」の質問に対して、「知っていた」と「名前だけ知っていた」はわずか4名で、8割以上の受講生が知らなかったが、表8の「もしチャンスがあれば、高知丸高に就職したいか」の質問に対して、<表8>と<グラフ8>に示した通り、「思う」が5名、「ややそう思う」が11名という結果になり、7割以上の受講生が高知丸高に興味を示した。その理由として、「職場の雰囲気よかった」(人文1年F)、「グループワークで話を聞いた際に、職場環境がすごく良いなという印象を受けたため、働きやすそうだなと感じた」(地域2年F)、「建設業界には興味はないが、高知丸高には本授業を通して興味を持った」(地域2年F)、「私自身防災に対する意識は高く、私が働く医療法人でも災害時に向けた取り組みを模索しているところだ。社会貢献的な要素の強い取り組みと、積み上げてきた技術への自信は働くのにとっても楽しそうだと感じた」(地域4年M)、「職場の環境は自然豊かで職員間の雰囲気もとても良いと感じた。外国人職員にも差別がないように見えた」(留学生F)等が挙げられた。また、「思わない」の理由として、「高知丸高は非常に良い会社だと思うし、実際に会社に勤められている方々も生き生きとしていて非常に良い環

<表7> 以前から高知丸高を知っていたか

質問項目	回答数(日/留)	割合(%)
知っていた	1(1/0)	4%
名前だけ知っていた	3(2/1)	14%
知らなかった	18(0/8)	82%

注：回答数(日/留)=回答数(日本人学生/留学生)



<グラフ7> 高知丸高の認知度

<表8> チャンスがあれば、高知丸高に就職したいか

質問項目	回答数(日/留)	割合(%)
強くそう思う	0(0/0)	0%
思う	5(2/3)	23%
ややそう思う	11(8/3)	50%
思わない	6(3/3)	27%

注：回答数(日/留)=回答数(日本人学生/留学生)



<グラフ8> 高知丸高への就職希望

境で働けるのだろうと感じた。一方、私は全く違う教育業界に勤めたいと思っているため、就職することはないと思う。しかし、もし私が建設業や接客業を探している人間だとしたら高知丸高に就職したいと思うだろう」(理工2年F)、「就職したい業種がすでに別に決まっているため」(地域2年F)等のようなコメントがあり、高知丸高に魅力を感じつつも、専門分野が違うことを理由に挙げるコメントが多かった。

また、「高知丸高との交流活動で学んだこと、感じたこと」については、「インターネットやパンフレットなどで企業の情報をただ見ると、実際に企業に訪問して会社や社員の雰囲気を見るのとでは、全く印象が違うと改めて感じた。高知丸高についても、会社の内装などがとても魅力的で社員同士も仲がよさそうだと感じたが、パンフレットの情報だけではここまで強い印象は持たなかったと思う。自分が就職活動をする際も、インターネットの情報とにらめっこするのではなく、実際に自分の足で確かめに行く必要があると感じた」(地域2年F)のように体験学習の大切さを再認識したというコメントがあった。また、留学生から「今までずっと日本の職場環境はきついと聞いていたので、日本で就職するつもりはなかったが、今回この企業を見学して、家族のような雰囲気に心を打たれた。このような企業に就職するのもいいかもしれないと思った」(留学生F)と日本企業に対して持っている固定概念を払拭することにつながったのではないかと思われるコメントもあった。

今回の高知丸高との交流活動を通して、将来の就職につながることであれば、そして、彼らが高知の活性化に寄与することになれば、本授業の波及効果にもつながり、担当者としてはこの上ない喜びである。

5. グループ発表



<写真5> 各グループの発表テーマ

最終発表は五つのグループに分かれて、「地域との互惠関係を構築するための方策」と「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、体験学習等を通して感じたこと、考えたこと、また調べたことについて地域の産官学の関係者の参加の下、

ハイブレッド型（対面中心+オンライン〈Teams〉）で行われた。今回は五グループのうち、一グループが「地域との互惠関係を構築するための方策」について、他の四グループは「多文化共生社会における地域振興の方策」というテーマを中心に発表が進められ、多文化共生社会についての関心の高さが窺われた。

1グループは「多文化共生社会における地域振興の方策」のテーマで、①包括的な文化理解、②異文化交流を促進するための活動、③教育側視点の多文化理解、の三つの視点から発表した。①では、自分たちの文化を伝えること、相手の文化について理解することについての諸取組みを提案し、②では、訪日外国人が少ない県（福島、徳島、鳥根、福井、高知）の要因とその改善策を提案し、③では、外国籍児童・生徒向け一学習支援教室の開催等について提案された。

2グループは「多文化共生社会における地域振興の方策」のテーマで発表し、高知県の新しい観光産業の開発を提案し、特に「坂本龍馬の萌えアニメを高知県で作る」という提案は他のグループの受講生の関心を誘った。この提案の狙いは①高知県の存在を世界中のオタクに知ってもらう、②聖地巡礼により観光業が発展する、③高知県のアニメーションスタジオが儲かる、④坂本龍馬が流行り、高知県の知名度が上がる、の4点である。また、高知県の公共交通の利便性の現状や高齢者等地域住民同士の交流機会が少ないこと、外国人として生活の中で困っていることについて述べた。

3グループは「地域との互惠関係を構築するための方策～まだ観光で東京行ってるの?～」のテーマで、高知県の人口減少が加速している現状を述べ、それを解決するには「関係人口」を増やすことを提案した。そのためには①体験型重視、②高知でしかできないことを売り出す、③「田舎といえば高知!」と連想されるよう認知度を高めることが重要であると述べた。そして、キャッチコピーの「まだ観光で東京行ってるの?」をコンセプトにしたツアーモデルを提示し、ツアーを通して高知県の魅力を知ってもらうことで、「関係人口」を増やすことにつながり、地域との互惠関係の構築にもつながると発表した。

4グループは「多文化共生社会と地域振興」をテーマに、「多文化共生のためのイベント」の企画を提案し、外国文化の存在を知り、五感で体験することが大事であることを述べ、実際に高知で開催されているイベントについて紹介した。また、多文化共生社会を作り出すためには、外国人と地域住民が

交流し合う場が必要であること、人口減少、少子高齢化におけるコミュニティの役割は大きいこと、移住してきた外国人だけでなく地域住民も参加する「コミュニティサークル」、気兼ねなく集まれる場を作ることが大切であることを力説した。

5グループは「私たちの考える“まちおこしの提案”～多文化共生社会における地域振興～」というテーマで、まずこれまでの学びを振り返り、地域の抱える課題を再確認し、学生の視点から「人材不足」「産業・特産品」「発信力」の3つを課題として考えた。それぞれの課題は、別個のものではなく関係しあいながら地域の諸課題を形成していること、また、実際に学生が経験してきた学びや他の地域で取り組まれている方策を参考にしながら、地域にマッチした取り組みの提案を地域の外からの視点で学びの還元として学生が担えるのではないかと提案した。最後に、高齢化や人口減少により発生する地域の課題は、高知県だけではなく学生それぞれの出身地でも発生する課題であることから、社会課題の1つとして学びを深めていく必要があると述べた。

発表終了後「一番独創的な提言をしたグループ」と「一番発表がよかったグループ」について受講生を含め、参加者に投票してもらったところ、どちらも3グループが最多の得票数を獲得するという結果になった。

6. 授業終了アンケート結果

授業終了後に授業全般に対して地域文化理解の深化、地域住民との交流や理解の深化、受講生同士の交流による多文化理解の深化、授業の取り組みや満足度等についてアンケートを実施した。その結果について6-1で見ていきたい。

6-1 活動全般に関する評価

<表9>及び<グラフ9>に示した通り、授業終了時に実施したアンケート結果では、いずれも4.2以上の高評価を博した。以下、いくつかの主要な項目における受講生のコメントを紹介していく。

まず、項目1の「授業を受けて、地域文化に対する理解が深まったか」について、「留学生とこれまで関わる機会があまりなかったが、この授業を通して交流することができ、どのような文化があるのか、どのような環境で生活してきたのか知ることができた」（地域2年F）、「高知県の様々な方々の話を

聞いて地域の理解を深めるとともに、実際に現地に足を運び実体験としての理解も沢山得ることができた」(理工2年F)、「高知に来て一年目で分からないことが多かった中で、この授業を通して地域の課題・問題点をしっかりと理解することができた」(理工1年M)、「地域の発展と多文化共生の社会づくりについて、各授業を通して専門家の説明を受け、多くの知識を学ぶことができた。また、見学を通して実際の事例を見学し、地域文化について理解を深めることができた」(留学生F)、「授業は、高知県の地域をめぐって地域発展の現状、課題、取り組みなどを多角的に紹介してくださって、高知県に対する地域文化が深く理解できるようになった」(理工1年M)等のコメントが寄せられ、授業を通しての学びだけでなく、本授業の国際共修としての取り組みも功を奏したと考える。

項目4の「一連の授業の活動の満足度」については4.5ポイントが得られた。評価の理由として、「教室でのビジターセッションなどに加え、実際に現地に出向き学ぶ活動があったため座学に勝る学びを得られたため大変満足」(理工2年F)、「学内でただ講義を聞くだけでなく、実際に地域へ訪れてその地域ならではの体験をさせてもらったり、様々な場所へ連れて行ってもらい、普段できないような経験をしながら学ぶことができた」(地域2年F)、「課外学習が多く、大変ではあったが、その分普段大学で授業を受けていると触れることのない生の文化を実際に自分で体感することができた。大学4年間を通して非常に思い出に残る授業だったと思う」(地域2年F)、「他の授業ではあまりできない地域住民との直接交流や授業の一環としての企業訪問など、貴重な体験が得られた」(農林1年F)、「課外活動が多く、直接地域に向いた活動をする機会が多く楽しく地域文化を学ぶことができた」(人文1年M)、「実習等大変勉強になり、最終発表でも多くの視点から地域について考えることができたが、他班の学生ともう少し交流したかった」(教育3年M)等のコメントが寄せられ、事前事後の教室での協働学習に加え、学外での体験活動は地域文化への理解を促す有効な手段であると考えられる。また、授業では国際共修の一つの取り組みとしてグループ活動を中心に据えており、より深い交流を促すため、体験活動(3)の企業見学時のグループ分けを除き、その他の活動はすべてグループメンバーを固定したため、他のグループとも交流したいという声もあった。今後のグループ構成を考える折、受講生同士が広く交流できるようにグループの編成を工夫していきたい。

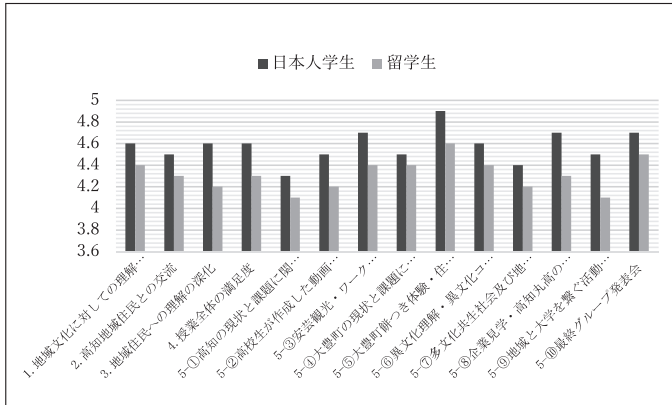
項目5の「一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度」については、

①②④⑥⑦⑨の講義、③⑤の体験活動及び⑧の企業との交流についてはいずれも4.2ポイント以上の高評価が得られ、本課題の取り組みが有効であったことが見受けられた。また、⑩最終グループ発表会については、「同じ課題ではあったものの、他のグループがどのように課題解決の糸口を見つけたのか、様々な視点や意見を知り、興味深いなと感じたり、今後の実習活動の参考になりそうだなと思ったりした」（地域2年F）、「他の班の発表はとても具体的かつ独創的で面白かった。私たちの班も様々な角度から考えて方針をたくさん考えることができた」（人文1年F）、「どのグループの発表もクオリティが異常に高く、見ていて面白かった。また、自分には思い浮かばなかった斬新なアイデアをたくさん見ることができて、刺激を受けた」（地域2年F）、「クラスメイト全体の発表を聞いて、この授業で勉強した知識と纏めて頭の中で再び整理することができた。とても有意義だった」（留学生F）等のコメントがあり、グループ発表を通して、多様な視点で地域との互惠関係や地域振興について考えることにつながり、受講生同士の相互の学びを促したと思われる。

＜表9＞ 終了アンケートの評価

NO	内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	平均値/ 回答者数
1	「地域文化理解」の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか	15	8	2	0	0	4.6	4.4	4.5/25
2	一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか	12	11	2	0	0	4.5	4.3	4.4/25
3	高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか	14	8	3	0	0	4.6	4.2	4.4/25
4	一連の授業の活動の満足度	14	9	2	0	0	4.6	4.3	4.5/25
5	一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度								
	①高知の現状と課題に関する講義	10	12	2	1	0	4.3	4.1	4.2/25
	②交流活動事前学習(高校生が作成した動画視聴)	14	4	5	0	0	4.5	4.2	4.4/23
	③安芸観光・ワークショップ・高校生との交流	13	8	1	0	0	4.7	4.4	4.5/22
	④大豊町の現状と課題に関する講義	13	10	1	0	0	4.5	4.4	4.5/24
	⑤大豊町餅つき体験・住民との交流(インタビュー活動)・立川番所見学	16	5	0	0	0	4.9	4.6	4.8/21
	⑥異文化理解・異文化コミュニケーションに関する講義	13	10	1	0	0	4.6	4.4	4.5/24
	⑦高知における多文化共生社会及び地域振興に関する講義	10	9	3	0	0	4.4	4.2	4.3/22
	⑧企業との交流(高知丸高の社員との交流)	12	10	0	0	0	4.7	4.3	4.5/22
	⑨地域と大学を繋ぐ活動に関する講義	12	7	4	0	0	4.5	4.1	4.3/23
	⑩最終グループ発表会	16	8	1	0	0	4.7	4.5	4.6/25

注1：5段階評価



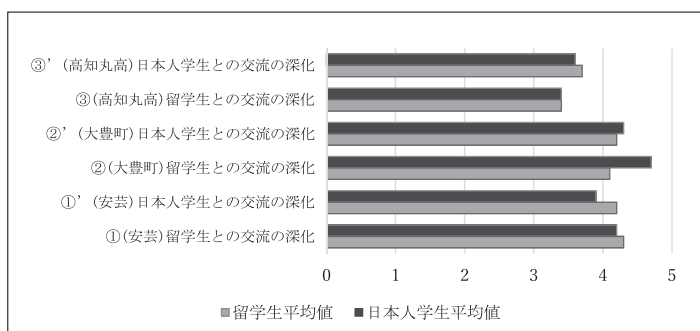
<グラフ9> 一連の授業活動の満足度 (日本人学生VS留学生)

6-2 国際共修展開の効果

近年、国際共修に関する授業展開及び実践研究が増えてきており、佐藤他(2011)では、「国際共修とは、単に留学生と日本人が机を並べて、同じ科目を履修するだけではなく、意図的な教育介入により、言語・文化背景の異なる学生同士が他者を理解し、己を見直し、新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習体験である」と述べている。本授業で行う一連の活動は、佐藤他(2011)の理念に従い、留学生と日本人学生の国際共修の相乗効果を最大限に引き出すべく、教室での協働学習並びに学外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、そして共に活動できるように、グループごとの活動を中心にしたものであった。2022年度は前述の通り、学外における体験活動は三回実施した。それぞれの活動後の振り返りでは活動を通して他の留学生との交流の深化、他の日本人学生との交流の深化の設問に対して<表10>並びに<グラフ10>の結果が得られた。三回の体験学習のそれぞれの活動時間については、安芸桜ヶ丘高校での活動時間が約3時間30分、大豊町での活動時間が約5時間30分、高知丸高での活動時間が約2時間であった。<表10>と<グラフ10>の評価で読み取れるように活動時間の長さが評価指数の高さに反映し、長い方が評価指数も高いという傾向が見られ、それが交流の深化にも繋がり、相互理解を深める一つの要因になったと考えられる。

<表10> 体験学習における受講生同士の交流の深化

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	平均値
1	安芸の交流活動で(他の)留学生との交流が深まったか	11	8	1	1	1	4.3	4.2	4.2
1'	安芸の交流活動で(他の)日本人学生との交流が深まったか	10	8	2	1	1	4.2	3.9	4
2	大豊町の交流活動で(他の)留学生との交流が深まったか	11	6	1	2	0	4.1	4.7	4.3
2'	大豊町の交流活動で(他の)日本人学生との交流が深まったか	10	7	2	1	0	4.2	4.3	4.3
3	高知丸高の交流活動で(他の)留学生との交流が深まったか	4	6	9	3	0	3.4	3.4	3.4
3'	高知丸高の交流活動で(他の)日本人学生との交流が深まったか	6	6	6	4	0	3.7	3.6	3.7



<グラフ10> 体験学習における受講生同士の交流の深化

<表11>と<グラフ11>の1'「(他の) 留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか」の評価理由として、「外国にはこのような文化があるのか、日本とはこのような違いがあるのか、といった発見をたくさん得られた」(地域2年F)、「よく交流しているマレーシアの留学生は豆知識を良く知っているため、多様な角度から自国のことを振り返り、積極的に意見交換した」(留学生F)、「最初の授業で、留学生と自己紹介をしたときに、自分が普段あまり知ることのない国の文化を知ることができた。また、他国のおすすめの観光スポットや時には政治についても留学生に質問し、興味を持つことができた」(地域2年F)、「留学生の考えや感覚を聞くことでなお理解が深まった場面が沢山あった」(理工2年F)、「自分が意図していなかったところにも気付いているところがあり、自分の中で新たな視点が増えた」(地域2年F)、「他国の留学生との交流で、他国の文化への理解が深まった」(留学生F)、「様々な国の文化を教えてもらったり、逆に日本のことを教えたりして理解を深めることができた」(農林1年F)、「海外と日本では、文化や言葉など違

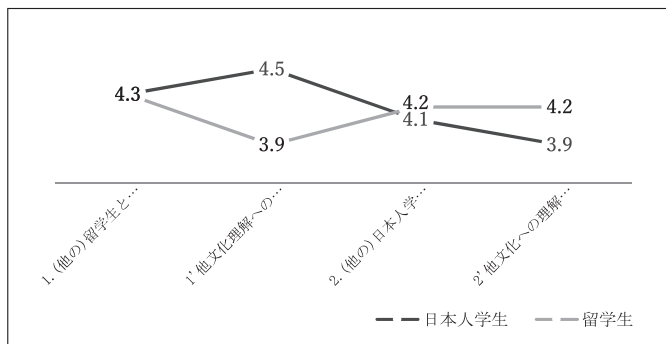
うものも多いけど、共通している部分もあってとても勉強になった」(理工1年M)、「日本とは違うブームや価値観を交流によって知ることができた」(留学生F)等のようなコメントがあり、日本人学生だけでなく、留学生も他の留学生との交流を通して多文化理解の深化につながった。

また、2'の「(他の)日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか」の評価理由として、「日本人の学生と知り合って、仲良くなって、日本の文化についての話をよく聞いて、日本の文化への理解が深まった」(留学生F)、「日本の文化には独自性があると感じた」(留学生F)、「学年や学部、出身地などが全く違って、だからこそおもしろいな、勉強になるなという視点もあったり、共感できる部分もあったりして、お互いを知ることができた」(地域2年F)、「基本的に関わる学生が他学部だったため、自分とは違う考え方や知らなかったことを学べたりした」(理工2年F)、「国籍が同じであっても違って、それぞれが持つ考えや視点が違い興味深かった」(地域2年F)、「出身都道府県が違う人だと環境が違うため文化も違うことが分かった」(地域2年F)、「同じ日本でも、地域が違うと今までの地元での暮らしも全く違うことが分かった」(農林1年F)、「最初のグループで共通点を見つける授業のなかで、各地方からの人が集まっていて、それぞれ特徴のあることを知ることができた」(理工1年M)等のコメントがあり、留学生は勿論のこと、一連の活動を通して日本人学生同士も他地域への理解につながっていることが窺えた。

このような国際共修の取り組みを通じて、留学生と日本人学生がともに主体的に行動を起こす様子が確認され、異文化理解や言語運用能力、自分への気づきが促され、互恵的学びが得られたと言える。

<表11> 受講生の相互交流・相互理解の深化(終了アンケート)

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生 平均値	留学生 平均値	平均値
1	一連の活動を通して、(他の)留学生との交流はできたか	11	11	3	0	0	4.3	4.3	4.3
1'	(他の)留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	12	8	4	1	0	4.5	3.9	4.2
2	一連の活動を通して、(他の)日本人学生との交流はできたか	11	8	5	1	0	4.1	4.2	4.2
2'	(他の)日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	10	8	5	2	0	3.9	4.2	4



<グラフ11> 受講生の相互交流・相互理解の深化

7. 終わりに

2022年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、これまで2年間中止されてきた交換留学生の受入れが再開されたことにより、留学生の受講生が増え、受講生25名のうち留学生10名と日本人学生15名による国際共修授業が行われた。また、体験学習も感染拡大防止策を図りつつ体験先の協力を得て予定通り3回実施することができた。授業の前半は地域の現状及び課題を認識するため、県の産業政策及び中山間地域の過疎化の現状をビクターセッションで学び、東部地域の中心都市での高校生との交流、中山間地域住民との交流を中心とした体験学習が行われた。そして、授業の後半では多文化共生社会における地域振興を中心に異文化理解教育や県の外国人受入れ政策及び高知県の取り組み状況を学習した。また、地域に生きる大学として、地域との連携活動等に関する学びを深め、外国人社員を積極的に採用している県内企業を見学するとともに交流活動を通じた体験活動が行われた。授業のテーマは前年度に引き続き、「多文化共生社会」という視点で地域振興を考える内容であり、各講義、活動実施後に行われる振り返り活動はすべてMicrosoft Formsを活用して行った。受講生が毎回の授業に真剣に取り組み、毎回の振り返り活動に各取り組みから学んだことや自らの考えや気づきを回答してくれた。この積み重ねが最終グループ発表において、地域との互惠関係の構築や多文化共生社会における地域振興についての解決策を提案するに至ったと言える。本授業を通して、今後個々人が自分事として地域振興を考えるきっかけになることを願いつつ、今後も本取り組みを継続していきたい。

授業の最後に、受講生は「私が考える地域との互惠関係を構築するための

方策」と「私が考える多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、レポートをまとめて提出した。それぞれのレポートが地域との互惠関係や地域振興を真剣に考える内容となっていた。ここにその一部を紹介する。

<受講生のレポート①> (地域4年M)

テーマ：地域との互惠関係を構築するための方策

学生にとって地域で得られる学びはとて大きなものである。本授業における学習でも、地域の取り組みについて事前に学ぶ“知識ベース”の学びと、実際に地域に行ってみて地域住民の生の声を聴く“経験”の学びを通して、より地域の実態や文化を理解できるカリキュラムになっている。学生は、学びを通して知識を広げるだけでなく、今後の進路や在学中の研究分野として様々な恩恵を受けることができる。しかし、学生が実際に地域を訪れて、数回地域のイベントに参加したり話を聞く程度では地域の恩恵は学生の恩恵に対してあまりに少ないと言える。極端に言えば、学生は地域で活動を行うだけで様々な経験や学びを得ることができるが、それに対して地域が得られるものは少ないということだ。では、学生が地域との互惠関係を構築するために地域に対して還元できることは何かを提案する。

まず、地域住民と学生で大きく違うのは暮らしてきた環境の違いによる視点の多様性だと感じる。高知大学の県外出身学生数は半数を優に超え、地域での活動においても様々なところから来た学生が、様々な視点で地域を見つめることができる。地域振興を考えると、「土の人 風の人」という考え方がある。簡単に言うと、「土の人」は地域を内側から見る地域住民を指し、「風の人」は地域を外側から見る地域外の人のことである。この2つがあることで、地域の特徴や文化が明確になり本当の姿が見えてくるという考え方だ。学生は、この考え方における「風の人」になる。外からの視点で感じる、地域の魅力や課題点を地域住民の方々と共有することで地域の魅力や課題点を再発見することにつながると考えられる。実際に、地域協働学部でも学生の視点から地域資源を再認識し商品化を行ったり、新たな取り組みのきっかけになった例がある。

次に、地域外からの視点で気付いた情報を地域に還元することが地域の恩恵になると考えた。自分の地元で考えると容易に想像できるように、自分が長く暮らしている地域ではあらゆることが当たり前になり、視点が主観に

偏ってしまう恐れがある。「土の人 風の人」として前述したとおり、学生は地域外からの客観的視点で様々な学習を行っている。学生の持つ客観的視点や、地域住民から学ぶ主観的視点を学びの成果として地域住民に対して還元することで、地域にとっての恩恵につながると考えた。

高知県の特に中山間地域では、人口減少による人手問題や高齢化による担い手問題が広く発生している。しかし、学生がこういった問題を解決するには限られた授業期間や他分野におけるタスクが大きな障害になると言える。イベントや人手を必要とするとき、学生がその時だけマンパワーとして地域に関わるのでは、人手不足や担い手問題の根本的解決にはならない。地域の抱える課題を分析し、解決に向けた方策を地域に対して提案していくのも地域との互惠関係の一つの形といえる。私が今回提案するのは、学びの還元だけでなく、更に次の段階の互惠関係構築を考えた。私が趣味で行っているキャンプを例にとって提案する。

高知県の中山間地域をはじめとした多くの地域では、人口減少と高齢化によって産業を維持できない状態となっている。その結果として若者の流出は加速し、“負の連鎖”を生んでいる。そこで、ランニングに多くの人出を必要とせず、近年需要の急増しているキャンプ場を地域で運営してはどうかと考えた。学生の関わり方としては、地域外からの視点で地域の魅力や課題点を分析し、学びの還元として地域住民に報告を行う。ここまでは授業でも可能な範囲だと考えられるが、実際に地域が取り組みを行うときには学生の履修期間が終了していることも考えられる。そこで、地域と学生を結ぶ窓口を設置し、履修終了後も自らの学びとして地域に関わりたい学生を対象に地域との関係を継続的にしていくというものだ。私が提案するキャンプ場は、開発にこそ人員が必要になることが多いが、完成後のランニングにはそれほど人手を必要としない。つまり、学生は地域住民との関わりを継続しながら自身の学びを深めることができ、地域にとっても求められる継続的な関わりによって地域産業を振興する新たな取り組みにつなげることができる。これは、キャンプ場に限ったものではなく、特産品を生かした商品開発においても可能な関係構築だと考えられる。例えば、授業で特産品と商品化案を提案し、継続して学びたい学生がその後もSNS活用のサポートや若年層の視点から商品開発に関わることで互惠関係を気付くことができると考えている。

学生の地域との互惠関係構築として、学びの還元を行うことはこれまでも言われてきた。しかし、地域で多く聞く学生に求められているものは継続的

な関わりが一つとしてあげられる。これまでの学びの還元止まらない互惠関係の構築が求められていると感じた。

<受講生のレポート②> (教育3年M)

テーマ：多文化共生社会における地域振興の方策

私は多文化共生社会における地域振興の方策として、まずは自国民に向けてアピールをし、我々自身が地域について知ろうとすることが大切であると考える。私は大学に入学してから約2年間で37都府県を自転車で観光してきたが、同じ日本であるのにかなりの特色、文化の違いのほか自己アピールの上手な地域とそうでない地域があると感じた。どの地域であっても魅力はあるが有名な観光地は交通の利便性や他言語への対応、景観や目的地までの案内といった国内外問わず来訪者に対して優しい印象を抱く。それに対してあまり有名にならない観光地はせっかくの魅力を発信することはもちろん、来訪者に向けて決して親切とは言えない印象を抱いた。地域と観光地が繋がっていないといってもいいかもしれない。地域と観光地の連携による魅力の発信こそ地域振興のポイントになるのではないかと考える。

このことを実現するために私は3つの考えがある。1つ目は地方において地域全体を観光地化することである。もちろん観光地は非日常が味わえ、今後も大切に継承するべきとは思いますが、観光の在り方を地域の食や歴史を楽しむといった考えから、その地域で暮らしてみても風土を身に染みて感じられるような体験という視点の観光の在り方も良いのではと考える。高知県で例を挙げると、高知県に観光する場合は、高知駅周辺の高知城やひろめ市場で食を楽しむ。桂浜や四万十川等で自然を楽しむといった観光の仕方が一般的だ。そうになると、観光者は私の住む高知市朝倉に来ることは考えにくいが高知ならではの気候や住宅での日常というのは高知市街では味わうことができないだろう。私は仮に1泊だけであっても郊外を訪れ、近所のスーパーや街並みを楽しむといった旅の在り方を推進しても良いのではと考える。このことが結果として地域の交通網の整備や、市街地単位でない郊外を含む地域全体の魅力の再発見と発信に繋がるのではないかと考える。2つ目は地域の方言や伝統をより可視化して推進していくべきだと考える。ゆるキャラを介してご当地を発信していくという方策は現在もあるが、坂本龍馬の萌えアニメのように高知県に対する強いインパクトを残せるような取り組みを行えばと考える。SNSの発信がかなりの経済効果を創出するように、町全体をよ

り発信し、キャラクターを生み出すということが結果として認知度に繋がり地域振興になるのではと考える。3つ目は世代を超えた交流である。現代の若い人はSNS等の情報技術に幼少のころより触れてきた。それに対して、年長者は伝統や様々な経験があり、私たち若者が学ぶべき点は多くある。多文化共生とは外国との関係ももちろんだが、私たち日本人の世代間の交流も含まれていると考える。年長者の知恵や経験を実際に体験し地域の文化と結び付けて味わうことができ、その体験を若者が世界に発信できればこれほど素晴らしいことはないのではないかと。私は大豊町の学習に行くまで大豊町は通過点だったが、初めて昼間に訪れた際の景色の美しさに感動するものがあった。世代間の交流が結果として地方創生にも繋がると考え、そのことが多文化社会の実現にもつながると考える。また、SNSでの発信を考えがちであるが、SNSを見ることで何か特典のある街づくりも良いと考える。スタンプラリーのようにゴールを設定するとすべて集めたくなるものだが日本全体としてSNSで地域について学ぶことでの割引や観光プランの提供が行えると一段と活性化につながると考える。

このように私は外国人を受け入れた多文化社会の実現には自国民への認知と国や地域の垣根を超えた連携、地域の今まで以上の活性化が不可欠ではないかと考える。交通網の整備などはどうしても国単位でないと難しい部分もあるのかもしれない。しかしながら、今あるものを最大限活用できればと思う。

<受講生のレポート③>抜粋 (農林1年F)

テーマ：地域との互惠関係を構築する方策

地域との互惠関係を構築する方策を考えるにあたり、今回モデル地域として考えた高知県は他の県に先駆けて高齢化・過疎化が進み、高齢化率は秋田県に次いで全国2位、数十年前から合計特殊出生率は2.0を下回っている。こうした自然減少と社会減少によって人口減少はさらに加速する一方であり、労働生産力の低下は勿論のこと、中山間地域の集落消滅に伴う文化の損失などの問題も発生している。

そのような高知県が互惠関係間において発生する相互利益として何を求めているのか。そこで参考となったのが大豊町の地域住民との交流活動だ。大豊町は町内における65歳以上の割合が5割を超える、高知県内で最も高齢化率が進んだ町だ。そこでのインタビュー活動の際、我々の「町の活性化のた

めに何が必要だと思うか」という質問に対して、住民は迷うことなく「人だ」と答えた。住民の減少に伴う集落機能の低下は地域住民同士の直接交流の機会を失わせると共に、消滅の直接的な要因となる。これにより、地域との互惠関係において、人を呼び込むことを最優先とした。

そこで筆者は、関係人口の増加を足がけにし、定住人口を増やしていこうと考えた。関係人口とは、「移住した『定住人口』でもなく、観光に来た『交流人口』でもない、地域と多様に関わる人々」(総務省.不明)を指すものとして、雑誌『ソトコト』の編集長である指出一正氏が提唱し始めた言葉だ。関係人口は現在増加傾向にあり、各地域の振興に大きな役割を担うようになってきている。関係人口は関わり方の違いによって4種類の分類がされており、それぞれで訪問頻度、滞在期間、地域活動への貢献度などが異なっている。その中で筆者が注目したのが、「趣味・消費型」の人々だ。地域活動への貢献度は低いものの、関係人口のうちこの分野に該当する人数が最も多く、かつそこから他分野へ移行して行く可能性など鑑みた結果この分野に焦点を絞って高知県との関係構築を目指すことにした。

「趣味・消費型」の人々は観光目的の訪問がきっかけとなり、関係人口に発展することが多い傾向にあることがわかった。こういった一度の訪問でその地域に関心を寄せ、訪問を重ねるうちに関係人口になっていた、というケースを見ていき考えたのは、この分野における関係人口獲得にはまずきっかけ作りをすることが重要だ、ということだ。

以上を踏まえて筆者は、地域との互惠関係を構築する方策として、高知県をめぐるツアーを組むことを提案した。理由は大きく分けて二つある。一つは、観光地側から提案することで地域の観光の戸口を広げ、気軽に訪問し関係を持ってもらうことに貢献できると考えている。もう一つは、高知県の交通の便が悪いことだ。これは観光においても非常にネックとなる。県の作成した観光マップなどを見るに、高知県の観光地はそれぞれにかなり距離があり、県外から観光に来て各所を巡ることが困難である。その点ツアーであれば長時間運転での疲労もなく、また中山間地域の入り組んだ道やバス等の時間に関しても心配せずに観光できるため、高知での観光手段として適しているのではないかと考える。

今回のツアー提案において、顧客層は若年層を想定した。理由は今回ターゲットとしている「趣味・消費型」の人口において、若年層の占める割合が大きかったことが挙げられる。情報が氾濫する今、SNSを活用する若者の目

に留まるには内容ばかりでなく、斬新なレイアウトや突飛な言葉、目を奪う色使いで存在を主張していく必要があると考える。

今回提案したツアーにおいて、反省した点は顧客層の選択だ。若年層という画一的な括りで考えるのではなく、よりニッチな要望に応えることで更に独自の顧客獲得法を考えられる。例えば高知県といえば酒、という先行イメージから、高知の酒を堪能してもらおうツアーを提案する、といったものを挙げられる。筆者の述べたこの方策は、まず浅くとも関係を構築し、地域から利益を得た者の中からもリピーターを確保し、移住可能性を持つ人数を増加させていくという方針で提案した。対象への興味関心は行動力と探究心を呼び、それを内包する地域への愛着に繋がっていく。

引用文献&参考文献

総務省.不明.「関係人口ポータルサイト」.関係人口とは | 『関係人口』ポータルサイト (soumu.go.jp)

みずほ総合研究所.2018.「関係人口による地方創生」.report20181114.pdf (mizuho-rt.co.jp)
高知県.2018.「高齢者等の現状と将来設計」.

https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/060201/files/2018022700035/file_20182261111216_1.pdf
ソトコト.2020.「教えて！小田切先生！国土交通省のアンケートから繙く、関係人口のイマ。」. <https://sotokoto-online.jp/social/1155>

<受講生のレポート④>抜粋 (農林1年F)

テーマ：地域との互惠関係を構築するための方策

現在、日本の多くの地域では若い人がいなくなり、人口が減少することによって地域社会が成り立たなくなっている。そこで、このような問題を解決するために私たち学生が地域と協力することで、何ができるのか具体的に考えた。

まず、地域はどのような問題を抱えているのか考えたところ、主な3つを挙げることができた。

1つ目は、産業・特産品の衰退である。各地域には、伝統的、または地域的な産業が根付いているが、近年ではそれらの担い手が少なくなり存続が危ぶまれているものが多い。

2つ目は、人材不足である。主に地方の地域から若い人が流出し、それによって新たに子供が増えることもなく、人口は減少するばかりである。そのため、高齢化が進み、地域社会は担い手不足に陥っている。

3つ目は、地域の発信力がないことである。もし他にはない魅力的な産業や観光資源を持っていたとしても、それが人々に伝わらなくては意味がなくなってしまう。

次に、これらの3つの課題を解決するために私たち学生が地域と協力してできることを考えた。

まず、産業・特産品の衰退を食い止める策としては、地域と地域の学校とが協力し、児童生徒・学生が実際に生産を体験するイベントを行うと良いと考えている。子供の時から自分の出身地の特産品の生産に携わってみることで、地元では何が有名なのか楽しみながら自然と学ぶことができ、将来それにかかわる仕事がしてみたいと思う人も増えると思う。また、違う地域の子供も招待することで、地域同士の交流や地域外からの人の流入を期待できる。

また、特産品そのもののPRを改善するのも効果的だと考えられる。伝統工芸はもともと独自性を持っているものが多いが、農産物で考えると、特定の1つの地域のみで生産されているものはめったになく、そのまま売り出しても多くの種類の中から選んでもらうことは難しい。そこで、農産物も工芸品のようにブランド化を進め、他との差別化を図ることが重要だと考える。例えば、茨城県で生産されている「イバラキング」という品種のメロンは、茨城のメロンの王様になってほしいという思いを込めて名付けられたものである。名前のインパクトが強いため、見た人に「メロン＝茨城」という印象を持ってもらうのに非常に効果的だと思う。新たなブランド名の一般公募などをしてみる、というのもPRの1つになると考えられる。

次に人材不足を解決するための策としては、雇用を増やすことが重要であると思う。田舎暮らしをしてみたい・田舎暮らしが好きであるという人も、仕事がなくはその地域に住み続けることは難しい。そこで、地域の特徴を生かした仕事を創出してみたら良いのではないかと考えている。例えば、高知県は歴史的建造物や資料が多く、坂本龍馬や板垣退助など全国的に有名な偉人の出身地でもある。そこで、高知県内の高校・大学で歴史関係の職に就きたいと考えている学生などを対象に、調査やガイドのボランティアやアルバイトの募集をかけてはどうかと考えている。これを通して、地域側は将来の担い手が増える、そして学生側は自分の就きたい職業への入口ができ、お互いに利益を得られるのではないかと思う。また、農業も盛んであるため、農産物を生産する職業に限らず、特産品を使った商品開発や生産に関わる仕事もあれば、働く人の幅も増えて様々な人が地域で働けるようになる。

最後に発信力の低さを改善する策としては、やはりSNSの活用が最も効果的であると思う。しかし、現在多くの自治体がそれぞれのSNSアカウントを持っているものの、あまり宣伝効果が表れないことも多い。そこで、私たち学生などの若い人材が協力することで、今の流行に沿った宣伝方法でPRをする、という案を思いついた。茨城県を例に挙げると、県公認のVtuber（バーチャルYouTuber）「茨ひより」というキャラクターがいる。彼女は自治体では初めて茨城県に公認され、茨城県のローカルインターネットテレビのアンウンサーとして働いている。現在、若い人を中心にVtuberの人气が非常に高まっており、茨ひよりの活躍は日本ではもちろん、世界に向けても高い宣伝効果を持っている。このように、どうすればより多くの人々に地域の魅力を知ってもらえるか、地域と学生が意見を出しながら考えていくことは先進的であると思う。

上で挙げた3つの問題点は、それぞれが独立しているのではなく相互的に影響を及ぼしあっている。そのため、私たち学生はもちろん、地域全体が問題に目を向け、様々な人が協力することで地域社会は成り立つと考えている。

参考文献

メロン | いばらきの農林水産物 | 茨城をたべよう 食と農のポータルサイト
(ibaraki-shokusai.net)

ひよりの部屋 / 茨城県 (pref.ibaraki.jp)

注1：文中で引用した受講生の所属は、以下の通りである。

- ・人文○年M or F = 人文社会科学部○年生男性or女性
- ・教育○年M or F = 教育学部○年生男性or女性
- ・理工○年M or F = 理工学部○年生男性or女性
- ・地域○年M or F = 地域協働学部○年生男性or女性
- ・農林○年M or F = 農林海洋科学部○年生男性or女性
- ・留学生M or F = 交換留学生男性or女性（非正規生）

注2：学生アンケート及びレポートの文章は「てにをは」を含め、読みやすいよう授業担当者による修正を施した。

謝辞

本プログラムの実施に当たり、講義については、ビジターセッション①と③では高知県産業振興推進部計画課町様及び高知県商工労働部雇用労働政策課山中様、ビ

ジターセッション②では集落活動センター「そばの里 立川」の立川地区活性化推進委員会委員長吉川様、高知県産業振興推進部地域支援企画員（大豊町）宗崎様並びに高知県大豊町産業建設課浦川様、ビジターセッション④では高知大学次世代地域創造センター赤池准教授のご協力を得て実施された。体験学習①については、高知県立安芸桜ヶ丘高等学校情報ビジネス科の先生方並びに生徒の皆様、体験学習②については、上記ビジターセッション②をご協力くださった方々並びに大豊町地元住民の皆様、そして体験学習③については、(株)高知丸高のご協力を得て実施の運びとなった。また、プログラム全体の構想や運営については、高知県中小企業団体中央会経営支援部の古木様、高瀬様にいろいろとお力添えをいただきました。この場をお借りして本プログラムの実施にご協力くださった皆様方に感謝の意を申し上げます。

参考文献

- SDGsコンパス (2022)「地域活性化の成功例20選 日本全国の自治体の取り組みを紹介」(sdgs-compass.jp)
- 大塚薫・林翠芳 (2016)「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題—高知文化事情に触れる体験を通して—」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
- 大塚薫・林翠芳 (2017)「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築—地域文化・観光体験調査の結果を通して—」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
- 大塚薫・林翠芳 (2018)「高大連携による地域文化体験を通じた交流学習活動の教育効果—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—」『高知大学留学生教育』第12号、pp.45-77
- 大塚薫・林翠芳 (2018)「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回JAISE年次大会（研究大会・総会）proceedings』 pp. #32-5-1-2
- 大塚薫・林翠芳 (2019)「インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築—国際共修による双方向往来の学びを通して—」ウェブマガジン『留学交流』2019年9月号 Vol.102 pp.13-24
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子 (2011)「共通教育課程における『国際共修ゼミ』の開設:留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』

第6巻、pp.143-156

島崎薫 (2017) 「地域住民との国際共修—留学生のアイデンティティの変化に着目して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3号、pp.227-237

週刊経団連タイムス 2021年2月11日 No.3487 「多文化共生社会の形成に向けた取り組みを聴く」

末松和子 (2014) 「キャンパスに共生社会を創る—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—」ウェブマガジン『留学交流』Vol.42、pp.11-21

総務省 (2017) 『多文化共生事例集～多文化共生推進プランから10年 共に拓く地域の未来～』 https://www.soumu.go.jp/main_content/000476646.pdf

柳田凜太郎 (2022) 「地域活性化とは？ 地方創生との違いをふまえ、なぜ必要なのかを解説」(aruhi-corp.co.jp)

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2017) 「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2018) 「留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築」『高知大学留学生教育』第12号、pp.23-43

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2020) 「体験学習を通じた留学生と日本人学生の国際共修授業—地域との互恵関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成—」『高知大学留学生教育』第13号、pp.55-86

林翠芳・大塚薫 (2021) 「多文化共生社会における地域振興構築に向けてのマインド形成」『高知大学留学生教育』第14号、pp.47-74

林翠芳・大塚薫 (2022) 「オンラインを活用した体験型授業の取り組み」『高知大学留学生教育』第15号、pp.59-99

LIN Cuifang

(高知大学グローバル教育支援センター教授)

おおつか かおる

(高知大学グローバル教育支援センター教授)